

羅 針 盤

第 17 号

令和5年9月25日（月）



◆ 人生は敗者復活戦

今年の夏の甲子園（第105回全国高等学校野球選手権記念大会）の決勝戦は、大正5年以来となる107年ぶりの優勝を目指す神奈川県代表の慶応高校と、昨年度の夏の覇者で2連覇を目指す宮城県代表の仙台育英高校での対戦となり、結果は8対2で、慶応高校が勝利を収めて2回目の優勝を果たしました。昨年度は仙台育英高校が優勝を勝ち得て、東北勢として初めて深紅の大優勝旗を手にした結果でしたが、仙台育英高校野球部の須江航（すえわたる）監督の優勝インタビューの中で話された「青春って、すごく密なので」は、コロナ禍で思い通りにはいかない日々を過ごしている青春世代の子どもたちのことに思いを馳せて表現された言葉であり、多くの人たちの心を揺さぶる言葉となりました。そんな須江監督は、夏の甲子園で日本一をとった後に、「次は日本一のチームではなく、幸福度の高いチームをつくりあげていきたい」と話をされていたそうです。須江監督が考える「幸福度の高いチーム」の「幸福」とは、つまり「自分ですべきと考え実行できたうえで、良い結果を残せることである」と、そして、「それは野球だけの話で終わらないことが重要である」と話されています。今年の夏の甲子園では準優勝という結果となりましたが、「負ける方が学びになる」といった話もされていて、生徒たちに「人生は敗者復活戦」といった言葉をよく使われているそうです。実はこの言葉は、須江監督の座右の銘だということで、「負けた時にこそ人間の価値というものがわかるから、グッドルーザー（負けても潔い敗者）であれ」といった話をして、宮城県大会の初戦の前日に選手全員には「負けた時にこそ全力で相手に拍手を送ってほしい」と伝えていたそうです。その言葉通りに、須江監督はもちろんのことながら選手たちも、優勝した慶応高校の森林監督や選手たちがインタビューをされているときに、しっかりと大きな拍手を送っていました。「人生は敗者復活戦」この言葉は、「敗者であることを素直に認める潔さ」と、しかしながら「このままでは決して終わることはできないというチャレンジ精神」、そして、だからこそ「絶対にやり遂げるという覚悟」といった意味合いが合わさった言葉です。「人生は敗者復活戦」という考え方は、私たちの日常生活のあらゆる場面で背中を押してくれる言葉ではないでしょうか。真剣に物事に取り組みれば取り組むほど、挫折した時の反動は大きなものかもしれませんが、その挫折を乗り越えた先に人としての大きな成長が待ち受けているはずです。逆境に強い人ばかりではありません。その逆境をどのように乗り越えていくのかといった

ことを工夫することで、人間としての総合力といったものが培われていくのではないのでしょうか。再挑戦することや、あるいは、やり直しをすることは何度でも可能であることを私たちに指し示してくれている言葉であると思います。そういった解釈をすることで、この言葉は大きな意味を持ち、成長するといったことが他人との比較ではなく、前日までの自分との対比の中で育んでいくべきことであると考えられるはずです。「人生は敗者復活戦」と考えられるような人としての成長を心より願っています。

